

ファッションと 環境の共生を目指して —エコもおしゃれもしたいあなたに—

ファッション評論家・ジャーナリスト **大内 順子**

●インタビューア— 循環とくらし編集部
鍛冶 美行・山川 肇

大内順子 PROFILE

ファッション評論家・ジャーナリスト

青山学院大学卒業。雑誌、新聞、ラジオ、テレビなど、幅広い分野で、ファッション・ジャーナリストとして活躍する。世界各地でのファッションコンクールの審査委員。パリ市より「パリの勲章」、ミラノ市より「市の紋章賞」をはじめNYファッショングループ、FEC等より受賞多数。2001年仏政府より芸術文化勲章オフィシエ章を受ける。著書「たたかわない生き方」(イーストプレス社)、「バリコレの最前列から」(アシェット婦人画報社)、「20世紀日本のファッション」(源流社)、「おしゃれのエッセンス」(近代文藝社)他、多数。



日本で廃棄されている繊維製品は、年間210万t強となっています。その内の約1割～2割しか再活用されておらず、残りはごみとなって処分されています。繊維製品は、その複合素材や製品としての多様性からリサイクルしにくいという現状があるためです。

世界で活躍されているファッション・ジャーナリスト、大内順子さんに、現状の衣類のごみ問題や環境問題、そしてファッションと環境の共生を目指すには何が大事なのかを伺いました。

現代の衣料品ごみ問題の背景と課題について、どのようにお考えでしょうか。

現代は、人々の考え方、生き方、生活環境、社会での在り方がさまざまな形で装いに反映されています。かつて、50万円する服が良いと思われていた社会では、50円のものなんて、誰も見向きもしませんでした。ところが、今では、100万円の服を

着る人もいれば、500円の服を着ている人もいらっしゃいます。これが当たり前になっています。着る人の欲求が個性化・多様化し、主導権は送り手から受け手に移ってきています。つまり個人一人ひとりの力がどんどん大きくなった結果、送り手は、受け手の好みや趣向に合った服を送り出すという流れになってきているんですね。個人の力が大きくなるのはとても良い面である一

方、多くの人は自分で衣服を作りませんから、自分に見合った服をどんどん購入することで、全体としての消費量が高まるわけです。その結果、ごみを多く出してしまうという問題も併発するのです。皆さん誰もが、毎日毎日、ごみを分類して出しているから、身近な問題としてわかりますよね。

これをいかに、ごみにせずにしていくか、ということがまず一番大きな問題だと思います。だからといって、今まで安いからいいわ、って気軽に10着買っていたのを半分にしなさいと言っても、皆さんは喜びませんよね（笑）。だからこれからの課題というのは、要らなくなった衣服をどう処理していくのかということ。例えば、途上国に送るという方法もありますが、それには輸送代も掛かるし、人件費もかかります。主旨としては良いけれども、必ずしも実践的であるとは言えません。

ファッション業界のごみ対策は？

土に還元される素材を開発することががずっと言われています。紙繊維やオーガニック繊維などに着目して、エコ素材を開発し発表している企業はあります。まだビジネスになるかどうかは分からない段階ですけれども、実際に始まっています。

東京コレクションでは、オーガニック繊維を謳い文句にしたデザイナーの作品が見られるようになっていきます。2010年に開催されたJFW - ジャパンクリエイション[†]では（写真1）、「エコ・モード」をテーマにした企画展がありました。東京コレクション等で活躍しているファッションデザイナーが、出展企業の繊維素材を使って作品を発表するという、デザイナーと出展者とのコラボレーション企画です。例えば、The Dress & Co. HIDEAKI SAKAGUCHI ブランドのデザイナー坂口英明は、エコロジー・マリエ（ウェディングドレス）を提案していました。（株）林与のオーガニックリネンのドレスに、天然原料から作られる生分解性ペーパーヤーン^{††}レース（栄レース（株））を重ねた作品です（写真2）。GUT'S DYNAMITE CABARETS ブランドの CABARET AKI / JACKAL



写真1 JFW - ジャパンクリエイション2010年会場風景（JFW - ジャパンクリエイション提供）

† JFW - ジャパンクリエイション：繊維総合見本市。一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構（JFW 推進機構）が行っているテキスタイル事業の一つ。東京コレクション（Japan Fashion Week (in Tokyo)）はJFW 推進機構が主催している。

†† 生分解性ペーパーヤーン：使用後は自然界の微生物によって最終的に水と炭酸ガスに分解される紙質の糸

KUZUは、バイオマス繊維のリヨセル⁺にコットンを複合させたカイハラ（株）のソフトデニムを用いたつなぎを紹介していました(写真3)。ライダーズジャケットには、植物由来のセルロースを主成分に、製造工程で溶融紡糸法⁺⁺を用いた新素材フォレッセ（東レ（株））が使われています。

いずれにせよ、素材開発には多大なコストがかかるのは必須で、一社だけ、一国だけでやろうとすれば非常に難しい現実があります。ですから世界レベルで同じ方向を目指すことが望まれます。国際間で複数の企業が連携し、開発に取り組めば、素材開発にとどまらず、もっと色々な形のものできあがって、社会が変

わっていくでしょう。例えば、大きな利益を上げている会社とその利益の何%かをエコ素材の開発に使うという法律を作ることも考えられるでしょう。

そういった国際間の企業の協働開発を実現させるには？

繊維の国際協定を作ればいいと思うのです。日本一国だけではなく、今や地球の持続可能性が問題になっているわけです。ですから、地球レベルの環境保全を目指せる指導者や、グローバルな視野をもった政治家たちが各国から集まって、G8のような閣僚会議を持ち、そこで話し合わなければならないと思います。核問題ですら締結できないのにと思



写真2

オーガニックリネンのドレスとペーパーヤーンのレースのドレスを重ねたウェディングドレス (JFW - ジャパンクリエイション提供)



写真3

バイオマス繊維リヨセルとコットンを複合したデニムのつなぎ (JFW - ジャパンクリエイション提供)

＋ バイオマス繊維のリヨセル：木材（ユーカリなど）等のパルプを原料とした再生セルロース繊維の一つ

＋＋ 溶融紡糸法：原料を熱で溶かした状態で、口金から押し出して繊維状にした後、冷やして固める方法。従来セルロース系繊維では環境負荷の高い薬剤や有機溶剤を使用した溶液紡糸法が使用されていた。



日本人で初めて、ファッションの発信拠点、パリのデザイナーのメゾン（オートクチュールの店）を訪れ、日本にファッションの最前線の紹介を果たした大内さんは、当時、日本人女性の尊敬と憧れの的でした。

われるかもしれませんが、衣類の問題はもっと身近に迫っている問題です。テロや紛争問題のような危険を孕んでいるわけではなく、地球に住んでいる人々に直接関係する問題です。雲を掴むような話しに聞こえるかもしれませんが。ですが、これからの時代、今まで開発途上であった国々が経済発展するに伴って、環境汚染の発生も懸念されます。服というのは、まず肌につけるもので、毎日着るものですから、一番生活に近い部分ですよね。今までは1枚で良かったのが、3枚になり、5枚になります。だから、繊維の国際協定を策定する研究機関をサポートすることは、これから大きな必要性があると私は思います。

他に必要なシステム構築は？

消費者が社会や環境に貢献している喜びを感じ、そこに対価を支払う

ようなシステムを作れば、随分と違ってくると思います。人間というのは誰しも、これが何かの役に立っている、人の為になっている、無駄じゃないんだって感じたときは嬉しいものですね。対象物を持たずとも、喜びに満たされた心持ちになります。自分の払ったお金が地球を守るために役に立っている、しかも楽しいと感じられれば、喜んで対価を支払うと思います。文化が進むにつれ、人は物的満足から、形のないものへの満足を求めるようになり、そこに付加価値を見出すようになります。ブランドの価値と似ていますよね。文化や情報に対して、対価を支払う人口が確実に増加していくのではないのでしょうか。例えば、50円のものを買ったときに1円がそこに行くだけでもいいわけです。一人の人が何億円寄付するのは大変ですが、何億人が参加すれば何億円になるわけですね。こういったシステムは、やはりその資金運用や活用用途も含め、一社や一国で構築できるものではなく、サミット等で検討されるべきだと思うのです。

ファッションデザイナーの環境に対する意識は？

2010年の夏、ロシアの山火事やパキスタンの大洪水、日本でもあれだけの酷暑が続きました。それに加え、今期の冬も、欧米をはじめアジア各国でも記録的な大雪が降り、オーストラリアでは大洪水にモンスーン、

世界各地で大災害が起こっています。皆さん、これはやっぱり地球がおかしくなっているのではないか、地球の環境問題のせいじゃないかと、肌で感じていらっしゃるのではないのでしょうか。これだけ異常気象が続くと、環境と結びついたムーブメントがいつ出てきても不思議はありません。デザイナーの中でも意識するものは出てきはじめています。

例えば、2010年は国連の定める国際生物多様性年でした。シャネルは、本当の毛皮を使わず、ファンシーファーと呼ばれている人工毛皮を使いました。アルマーニーも使っています。必ずしも、廃棄物とは結びついていないけれども、意識の上では環境、地球環境が大きくなっていることを示しています。今これから、自分達の子供や孫の世代のみならず、何世紀にもわたる未来に向けて、地球がこれ以上、決して荒らされてはいけないという切実な思いがあります。生物の多様性を称える国際生物多様性年も、この思いから出ていると思います。

私たちの身近な問題として、おしゃれとエコの関係について伺います。

私たちが、これ、いいわ、素敵だわと思った服というのは、安いとか良いとかの問題ではないですよ。自分で必要だと思った、気に入った服。だから買うんです。ですから、まず気に入った一つのものを徹底的

に使うというのが、エコの手始めじゃないかしら？「おしゃれ」というのは、最終的に自分がどういう風にアレンジして、工夫をして、身につけるのか、ですね。おしゃれはプロダクトとしての衣料品ではありません。気に入った新しい服を購入し、ただ着ているだけではなく、今の手芸ブームを利用して、自分でちょっと手を加えて、「私らしさ」を表現することはできます。ユーズドなんかも、バリエーションの一つとして良いと思います。日本もそうですが、フランスも一等地にそこそこの値段のする古着専門店を構えています。古着ブームも考えられますが、やっぱり、一番にそれがカッコ良かったからです。ですから、環境に優しい「おしゃれ」はいっぱいありますね。ただ、申し上げたいのは、エコも意義だけじゃなくって、楽しみながらでないと長続きしません。あ、それ素敵だわ、私もやりたいわと思うような「よそおい」を楽しむこと。これはとても大事だと思います。

ファッションと環境の共生を目指すために、私たちに何ができるのでしょうか？

現在は、色んな装いのバリエーションの中から自分にあったものを選べるという、選択の自由があるわけですね。ですから、個人が自由に選択できる範囲が広がれば広いほど、選択肢が増えて良いわけです。手芸、ユーズド、ある人は10年前

ものを持ち出してまた着るかもしれないし、またある人は1着を毎日毎日着続けるかもしれません。でも、ひょっとしてシャネルの洋服を100何万出して買うかもしれません。それは自由。色々あって不思議じゃないわけです。自分の好み、経済状況、自分の生き方によって、装いを選べるんですね。

しかし、衣類はリサイクルが難しく、その多くは廃棄処分される現状があるわけです。その事実の上で、何を選ぶのか。今、ある意味で非常に大事な時です。個人にその選択が任されている部分が多だけに、これからどんな社会になっていくのか、その鍵を握っているのは個人の行動にあります。皆さんの環境や衣料品の廃棄物への意識が高まってくれば、そこに注目して洋服を買いたいと思うでしょう。またそれが魅力的なデザインで、自分の好みにあっ

たものだったら、なおさら買うでしょう。ファッションは社会の動きと連動しています。社会の動きを反映して、製造者は消費者のニーズに合う製品を提供します。消費者の選択がファッションを生み出す時代なのです。これから持続可能な環境を守っていくために、皆さんがご自分の行動に責任を持っていただきたいと思います。そのことを意識して、自分で選んだ服に対して、最後まで責任をもっていただきたいと願います。

廃棄物資源循環学会が、衣料品のごみ問題を読者の皆さんに考えていただく切っ掛けになるように、今後とも情報を発信し続けていきたいと思っています。本日は、おいそがしいところ、インタビューにお答えいただき、誠にありがとうございました。



「わたくしには喜びや嬉しさが優先されてしまうのです。自分の興味への探求、その結果得た感動をより多くの人に伝えたい。この伝えたい願望が仕事になっていって、思わぬ良い結果を生んだのですね」とご自身を振り返って微笑まれる大内さん。

それは、大内さんの選択された生き方そのもの。美しき人生、という言葉がまさにぴったりだと思います。

写真：安井敏雄撮影